- 8 エゾシカ寄生マダニ類について 高橋健一・伊東拓也 (北海道衛研・医動物) Ixodid Ticks Parasitic on Sika Deer (*Cervus nippon yezoensis*) K. Takahashi and T. Ito

北海道網走管内と胆振管内で捕獲されたエゾシカ合計20頭に寄生していたマダニ類について、その種類の同定を行った。合計488個体のマダニが得られ、そのうち486個体が成ダニ、2個体が若ダニであった。それらは、2属4種に分類された。最優占種はシュルツェマダニ *Ixodes persulcatus* で271個体、ついでヤマトマダニ *I. ovatus* 195個体、ダグラスチマダニ *Haemaphysalis* sp. 21個体、フタトゲチマダニ *H. longicornis* 1個体の順であった。地域的には、網走管内でシュルツェマダニが優占であったのに対し、胆振ではヤマトマダニが優占種であった。

- 10 ロシア極東地域におけるライム病ボレリアrRNA遺伝子のRFLPパターン ○佐藤雪太・宮本健司 (旭川医大・寄生虫)・柳原保武 (静岡県立大・微生物) E. I. Korenberg (Gamaleya Institute, RUSSIA) RFLP analysis of the Lyme disease spirochetes isolated in the Far Eastern Russia Y. Sato, K. Miyamoto, Y. Yanagihara, E. I. Korenberg

本年5月下旬に、ロシア極東地域のハバロフスク・ウラジオストクおよびユジノサハリンスクにおいて、シュルツェマダニと野生小動物からボレリアの分離およびrRNA遺伝子のRFLP解析を行なった。上記3地域でのマダニからはリボタイプIV型の分離頻度がもっとも大きく、他にII型、III型およびV型が分離された。また、*Apodemus agrarius* 4匹、*A. peninsulae* 10匹、*Clethrionomys rufocanus* 25匹、*Tamias sibiricus* 8匹、*Sorex* sp. 1匹、計48匹の野生小動物を捕獲した。これらのうち *A. peninsulae* 2匹および *C. rufocanus* 8匹からリボタイプIII型およびIV型が分離された。また、ライム病ボレリアのプロトタイプ株 (B31; 北米) の遺伝子型であるリボタイプI型は、マダニおよび野生小動物由来のいずれの分離株にも見られなかった。

- 9 1995年度のマダニ刺咬例とボレリア分離状況 ○宮本健司, 中尾 稔, 佐藤雪太 (旭川医大・寄生虫) 橋本喜夫 (旭川医大・皮膚科) K. Miyamoto, M. Nakao, Y. Sato & Y. Hashimoto Tick bite cases and isolations of agent of Lyme disease in 1995.

今年度は、例年に比べ刺咬例が多く、現在(7月末)までに57例を経験した。このうちマダニ標本を確認できたのは38件(シュルツェマダニ:34個体, ヤマトマダニ4個体), 標本の無いものは19件であった。マダニ寄生部位は多岐にわたる。各症例の月別発生状況は6月が26件(45.6%)で最も多く、次いで5月の21件である。この状況は、1980年からの集計数と同様の傾向を示している。

マダニ寄生者から直接ボレリア分離のために45例の皮膚を培養した。その結果、マダニ標本の無い群19例中5例(男3, 女2)菌体を確認した。これまで13件のボレリア分離例を報告しているが、いずれも今回と同様受診前に自らダニ標本の除去した例のみであった。このことから寄生したマダニを"つまんで"除去することは、ボレリア伝播に重要な引き金となっていることが推測される。

- 11 ハエ症の2例 ○宮本健司(旭川医大), 篠永哲(東京医科歯科大), 岩佐光啓(帯広畜産大), 高橋達郎(釧路労災病院) K. Miyamoto, S. Shinonaga, M. Iwasa & T. Takahashi Two cases of myiasis at Hokkaido.

1994年7月31日に、神経性疾患で長期入院男性患者(43才)の陰茎亀頭部から、ハエ幼虫を回収した。咽頭骨格や後方気門の形態からシリグロニクバエの3齢幼虫であった。

同年8月31日に筋萎縮性側索硬化症で入院中の女性患者(58才)の右第2指爪陥入部からハエ幼虫を2個体採取した。1個体は死んでいたが、その形態からニクバエ科の2齢幼虫と判明した。しかし、種の同定はできなかった。一方、活発に運動する幼虫は馬肉を餌として飼育した結果、12日後に蛹化した。この蛹を4℃下に保存、約9ヵ月後に室温へ戻すと雌成虫が羽化した。この成虫を日本産の既知標本と比較検討したが、一致するものがなかった。このような症例がみられることから、重症患者や高齢者の病室は夏期に衛生管理を強化しなければならないことを痛感した。